

特別企画 「グローバルコミュニケーション専攻」始動

国境を越えた相互理解（グローバルコミュニケーション）をめざす仲間づくりを

平 岡 麻 里

1. “グローバル”と私

本年度より新設された本学共生科学部グローバルコミュニケーション専攻に2020年4月1日付で専任教員として着任してから、はや半年以上がすぎました。すでに新型コロナウイルス流行が問題視されている時期でしたので、任命式も例年の大磯ではなく大学の横浜事務局で行われ、入学式やスクーリングも全面オンラインとなるなど、とにかく異例づくしの初年度を送っているところです。しかも、私にとっては初めて通信制大学での教育活動です。今までと異なる業務や教育方法が求められているなか、目の前のことに集中してスタッフおよび同僚の教員の方々にご迷惑をかけないように、そしてグローバルコミュニケーション専攻の記念すべき一期生となる学生の皆さんに実りある学びを提供できるように、試行錯誤を続けながらも刺激的な毎日を送っています。

そもそも星槎大学が新専攻を立ち上げ、英語科教職課程を設置するという話をはじめて聞いたのは2019年の冬でした。その新専攻の名称がグローバルコミュニケーションであることもほぼ同じ時期に知りました。“グローバル”はグローバルとローカルから作られた造語だということは想像に難くないでしょう。しかし、正直に言うと、この時点で私はグローバルという言葉は知ってはいましたが、その用語がコミュニケーションと一緒に使われる場合、そして教育などの人文・社会科学系の学問領域を示す場合、何を目指しているのかすぐにはピンときませんでした。私が知っていた“グローバル”は、例えばマクドナルドのチキンタツタやてりやきマックバーガー、そして英語教員としては英米の出版社が世界向けに出版している英語教科書が日本向けには日本の教育現場に合わせた版になっているといった印象が強かったからです。つまりビジネスの世界、より端的には「お金儲け」と密接にかかわる言葉としてとらえていました。

これは後で調べてわかったのですが、もともとこの用語は1980年代に日本企業が製品やサービスを世界各地（グローバル）の市場に適合（ローカライゼーション）させて販路を増やす戦略を“グローバル”と形容したことから始まっているそうです。そうすると、前述した私の印象は間違っていないかもしれません。そこに英語力が必要になるのもわかります。そして、私はここ15年ほど日本の大学で英語を教えています。特に英語教育でもESP（English for Specific Purposes）分野を中心に活動してきました。ESPとは、何か目的（仕事や勉強など）

がある人が、その専門分野で使われている英語を学ぶことが実用という意味でもモチベーション的にも重要であり、そして、その場合に教えるべき英語はどのような内容やスキルであるべきで、また、誰がどうやって、どの段階で教えるのが適切か、ということを検討し実践する英語教育研究の一分野です。つまり、星槎大学のグローバルコミュニケーション専攻が国際的に活躍するビジネスマンを養成することを目的としているのであれば、そこで必要となる英語力を考えることは ESP の分野でできることです。しかし、専攻の趣旨は共生社会実現のため国境の枠を超えた相互理解を促進するために、自己発信や世界の様々な地域の人々への理解を深める手段としての英語学習を目的とし、またそういった人材を学校教育のなかで育むことのできる英語科教員の養成です。このように、星槎大学が全体として掲げる共生科学が目指すところを示す理念と非常にビジネス的な印象の強い“グローバル”という言葉との関係性が、私のなかでどうしてもしっくりいかなかったのです。

その後、専攻関係者で山脇先生を囲みグローバルコミュニケーション専攻の設立理念をお聞きし、議論を交わす機会があり、驚くべきことに“グローバル”という概念は、私が長年研究で主張してきたことと同じだということがわかったのです。私は、前述のように日本の大学で英語を中心に教育活動していますが、研究活動は歴史、それも教育史の分野で、特に日英間の教育情報の流入と影響に関する史的研究を中心に行っています。この分野ではほとんどの研究が「英国から日本へ」の情報の流入と日本への影響を扱っています。例えば明治時代の鉄道や郵便制度はイギリスから学んだこと、そしてそこに関わった日英の人物に関する研究などです。こうした日本の近代化が全体としてグローバル化、つまり世界の均質化への動きであることは明らかです。よって、日本の近代化の研究は世界の均質化、特に西洋世界への質的同化、さらには西洋的価値観の日本での受容の研究になることは自然なことです。

しかし、少し考えてみても二国間で交流があった場合にお互いに関する情報の行き来が一方方向だけということはありません。「日本から英国へ」という流れも同時にあったはずで。そして、英国にはその痕跡があるはずで。実際、私がイギリスの大学院でイギリスの教育史を学んでいた時にその痕跡を幾つも発見しました。もちろんその痕跡は大きなものではありませんし、イギリス社会が日本から受けた影響は、日本がイギリスから受けたものとは比較にならないほど小さいものです。しかし、それを「なかった」ものにしてしまっているのでしょうか。少なくとも、イギリスの大学院で学んでいた日本人である私がそれを見遇すべきではないと強く思ったことが、この研究テーマを取り上げたきっかけです。そして、私は今まで自分の研究を日英間のトランスナショナルな教育情報の伝播とイギリス側の受容の研究だと説明してきましたが、日本人研究者が日本の教育情報の英国での受容を扱うという意味で、まさに“グローバル”な研究といっても良いのではないかと、このように考えるに至ったのです。

その後、いろいろ調べているうちに“グローバル”という用語は 1980 年代のビジネス用語から現在は人文・社会科学分野の学術用語として再定義されていることも知りました。私が 19 世紀後半～20 世紀初頭にかけての英国における日本教育観についての研究を博士論文

として提出したのは2015年ですが、その頃は寡聞にも山脇先生が提唱されているグローバル公共哲学というコンセプトも知らず、ビジネス分野での印象のために違和感をもっていた“グローバル”が、逆に自分の研究アプローチを最もよく示すことができる言葉であると感じが付いたのです。これは非常に幸運なことでした。なぜなら、このアプローチは私が研究だけでなく、教育でも大切にしてきたことだったからです。

2. グローカルコミュニケーションを可能にする教育

上述したような思索のなかで私が理解した“グローバル”コミュニケーション専攻が目指すべき方向は、西洋世界への同質化のための語学学習や知識取得ではありません。この点が日本に多数あるグローバルを冠した学問領域の小区分と大きく違う点です。つまり、英語圏の人々のように英語を話すようになる（俗にいう「英語がペラペラ」になる）ことや、欧米社会に溶け込むための知識の獲得を目的としているのではなく、例えば英語学習では、自分のこと、日本のことをしっかり伝えることができ、また相手の言うことを十分に理解できる英語力を目指します。この相手とは伝統的な英語圏諸国の出身者だけでなく、英語を使ってコミュニケーションを行うすべての人たちのことです。ノン・ネイティブ同士のコミュニケーションに大切なのは簡潔で明確な、そして基本に忠実な言語運用です。また、学べき世界の文化は欧米だけでなく、必要と興味に応じて世界中を対象とするべきです。そこにはもちろん自文化も含まれます。効果的に発信するためには、自文化を良く知り、それを相対化する必要があるからです。これらのことを私が現在の担当科目の「実践英語コミュニケーションⅡ」「英語表現（Conversation）」「英語演習（1）」でどのように実践しているのかを以下に説明します。

「実践英語コミュニケーションⅡ」は英語科教職課程の必修科目ですので、英語科教員免許取得を目指す学生は全員が履修する必要があります。英語を母語とする教員が担当するⅠの後、または同時の受講と規定されていますので、ある程度の英語の発話のトレーニングをした後に適切な内容として学修内容を設定しています。具体的には、自分や日本について、日本語を理解しない相手に向けて英語で発信することを想定して、プレゼンテーションの計画、原稿執筆、パワーポイントなどの視覚補助資料の作成、そして口頭での発表を行います。ここでは、英語を単に「読む、書く、聞く、話す」技術としてとらえずに、英語で考えをまとめ、それを言葉以外の方法も使って、効果的に伝える技術を磨くことを目的としています。また、フォーマルまたはセミフォーマルな英語、つまり教育の場にふさわしい英語を使うことができ、インフォーマルでカジュアルな英語と区別することができるようになることを目指しています。

通信制課程であっても可能な限り実践的な教育効果を上げるために、レポートで自己紹介作成（スクーリングで発表）、スクーリングでは自分の故郷の紹介原稿を受講者間で相互確認（Peer Review）して発表、科目修得試験としてはデータを示しながら自分の将来設計を説明（原稿と音声または動画を提出）と合計3回のプレゼンテーションを経験できるプログ

ラムを組んでいます。また、特に力をいれているのは、英語でのパワーポイントの作成です。文ではなくキーワードで要点を提示するように指導しますが、慣れてないと難しいようです。長い英文はスライドで表示されても理解するのは難しいので、非常に大切なスキルです。また、パワーポイント自体は慣れている学生もいれば、ほとんど初心者の学生もいる状態で、学生間に大きな差があるということが半年を過ぎてわかりました。特に今年は新型コロナウイルス流行のため全面的にオンライン・スクーリングとなっており、Zoom を使って画面共有しながら行う発表は難しいのは理解できます。スクーリングでも画面共有が上手くいかない、動画が固まる、音声流れない、などのトラブルがありました、しかし、時間をかけながらも全員がなんとか発表をこなすことができたので、現場の教員が今まさに求められている ICT を使った授業の成功体験を多少なりとも得ることができたのであろうと思っています。

他には、語学の選択科目の「英語表現 (Conversation)」と「英語演習 (1)」を担当しています。「英語表現 (Conversation)」は中学・高校の教員に必要な会話力を養うことを目的としていますが、通信制課程のため実践的な会話力の修得は困難な部分があることは否定できません。これをどのように克服するか検討の末、本年度は世界各地の若者が自分の住む町と自分自身について語る DVD 映像を見ながら演習問題に取り組むテキストを採用し、スクーリングでは自己紹介や自分の街についてミニプレゼンをする形で学んだことを生かす機会を設けました。小グループでの自己紹介後に代表者が全員にグループメンバーを紹介する活動や、発表原稿の相互確認、発表の相互評価、などのアクティビティを行ったので、十分とはいえないかもしれませんが学んだ英語を実践することができ、また他の学生の発表を聞くことで、自分の現在の英語力を客観的に見つめることができたと思います。来年度は e-learning を活用することで個別の発話のトレーニングを促進できる教材を採用予定で、検討を重ねながら可能性を探っています。

上記の2科目は特に高い英語力は想定していませんが、「英語演習 (1)」は「高度な英語力」を養うとシラバスにも明記しているように、中上級～上級向けの科目です。また、教材選定の際には、グローバルコミュニケーション専攻が養成する人材像を目指すために、語学だけでなく英語の背景にある歴史や異文化についての知識、そして現在世界で起きていることを日本以外の視点から学ぶことも重要と考え、私の研究フィールドであるイギリスの BBC (イギリス公共放送) の最新のニュース映像を使用したテキストを採用しています。このテキストでは、イギリス内外の世界情勢に触れながら、高度なリスニングや発信力を養うことができ、学修過程では語彙学習、内容理解の確認、ディクテーションなどを行うとともに、内容に関連したトピックについて英語による作文も課しています。また、教材の英語は基本的にイギリス英語です。イギリス英語は世界で話されている多様な英語のうちの重要なバリエーションの一つですので、スクーリングではアメリカ英語との違いなどにも触れながら、英語の多様性を実感できるような授業内容を心掛けています。

これら語学科目以外に、来年度からは「地域研究 (3) ヨーロッパ」を担当することになっています。グローバルコミュニケーション専攻では「地域研究概論」(2021 年度より開講)

で理論的枠組みを扱い、「地域研究 (1)」ではアジア、「地域研究 (2)」ではアフリカ、そして「地域研究 (3)」でヨーロッパというカリキュラム構成となっています。学生はすべての科目を履修することもできますし、興味のある地域だけを選んで学ぶこともできます。私の担当科目ではヨーロッパでありヨーロッパでないといわれるイギリスを中心に扱い、その文化的・社会的アイデンティティを現代的問題と歴史的背景の両方から考察し、論理的にまとめる力を養成することを目指します。イギリスは大陸からほど近い「島国」であること、かつて「帝国」であったこと、現在「立憲君主国」の政体をとっていること、などの点で日本との比較も可能であるため、“グローバル”な視点での学びに適しています。また、知識の伝達ではなく、自分で調べてまとめ、発表と意見交換の後、ある程度まとまったレポートを完成させる、その一連の知的作業を経験するある意味「ゼミ」のような学びを経験することも目標としています。

私は、大学での学びは、通学制であれ通信制であれ、指定されている教科書の学修とスクーリングや授業などによる教員からの知識の伝達だけでは完結しないと考えています。むしろそれらは学びの始まりなのです。そして、これは語学学習であっても同じです。語学はある意味実技科目であり、上達のためには個人の地道なトレーニングが必要です。そのため科目履修による学修のなかでできることには限界があるのです。つまり、科目履修での学修は始まりであり、単位が取れば終わりではないのです。さらに付け加えると、星槎大学は学びたい学生だけがいる素晴らしい環境です。そのなかで学生の皆さんが独立した学習者として学びつづける手がかりをつかむことができる場づくりをすること、一緒に学べる仲間づくりをすること、そして教員である自分もその仲間の一人として、グローバルコミュニケーションの実践、研究、そして教育活動をしていくことを大変楽しみにしています。